

第16回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

【優秀書評賞】

前川 和輝 (社会学部 4 年次生)

「逃避型ネット依存の社会心理」

大野志郎／勁草書房(2020 年)

【 佳 作 】

西村 瑞音 (社会学部 2 年次生)

「流浪の月」

凧良ゆう／東京創元社(2019 年)

【 総 合 講 評 】

図書館長 経営学部 井上 敏

今年度の書評賞は 47 本の応募がありました。昨年度は非常に残念な結果となってしまいましたので、今年度こそはという意気込みで審査をする我々もドキドキしながら 1 次、2 次の審査を行いました。

その結果、残念ながら今回も最優秀書評賞は該当なし、となったものの、優秀書評賞と佳作はそれぞれ 1 作ずつ、書評賞選考委員会で決定しました。

優秀書評賞は大野志郎さんの『逃避型ネット依存の社会心理』(勁草書房 2020 年) を取り上げた社会学部 4 年生の前川和輝さん、佳作は凧良ゆうさんの『流浪の月』(東京創元社 2019 年) を取り上げた社会学部 2 年生の西村瑞音さんとなりました。

まず優秀書評賞の『逃避型ネット依存の社会心理』は東京大学に出された博士論文で、社会情報学の研究者が書いた専門書。かなり難解な用語や研究者の研究内容が出てくるにもかかわらず、書評としてシンプルにわかりやすく本の内容をまとめており、一見して読んだ段階でも大変読みやすい文章でした。限られた字数の中で充分に要約できている点は委員の評価が高かった点の一つだったと思います。本書の中にも書かれている通り、「インターネット依存」の定義が研究者の間でも

統一されていない中、この本の著者が切り込んだ研究に対して調査対象を若者だけでなく、中高年以上の調査も行ったうえでもう少し考えるべき、という意見は本書を理解した上で自然に出てきたものと思います。

また佳作の『流浪の月』については BL (ボーイズラブ) を取り上げた作品も書いてきた作家の凧良ゆうさんの作品。2020 年の本屋大賞を受賞し、若手の有名俳優陣によって映画化までされました。凧良さんの作品は BL だけでなく、「世間と相容れない人間」をテーマに書かれていることでも知られており、この点、『流浪の月』においてもその点は一貫されています。書評にも書かれている通り、「事実なんてない。その解釈があるだけだ」と本の中では言っていますが、自分というフィルターを通して見た「事実」は本当に事実なのか？ 事実なんてないのでは？ という書評者の率直な意見が印象的でした。本としての書評以外にも、映画としての評価、特に李相日監督の映像等への評価もインターネット上であふれている中で、思ったことが書かれている印象でした。そして「自分にとっての常識や事実を疑う必要はない」けれど、その常識や事実は必ずしも他者と共通しているわけではないということは忘れてはならないだろう」と言っており、自分の中でこの本を咀嚼した上で、素直に発露した思いが書かれているように感じました。

最後にこの 2 本の入選作から私が受けた感想を

まとめて講評を終えることにしたいと思います。今回書評賞を受賞した作品は何れも、私たちが生きているこの社会で直面している「生きづらさ」を映し出している作品が選ばれたように思えます。優秀作は日常生活のストレスから逃避するためにインターネットに依存してしまう社会問題を扱ったものでしたし、佳作の作品も世間から押し付けられる事実と当事者が感じる事実とのズレ、それが複雑化した社会の中では益々おかしなことになっていくということなのでしょう。私たちが生きていくこの社会は益々複雑で混迷していくように思えます。その中で私たちが何を確かなものとして生きていけるのか。その手掛かりを考える場が大学というところなのかもしれません。

それを踏まえると大学における図書館の役割というのはこれまでの人類の知恵の集積の上に、「これから」を考えていくための知恵を作り出す、そのアシストをすることなのかもしれません。その意味でも今回の書評賞は図書館の役割を改めて考えさせられた機会となりました。

【 優秀書評賞 】

「逃避型ネット依存の社会心理」

前川 和輝（社会学部4年次生）

ネット依存は、インターネットの普及や、ネット人口の増加に伴って注目を浴びていった社会問題である。特に、2019年5月にWHOによって「ゲーム障害」が国際疾病分類に含められたことを受け、香川県では「ネット・ゲーム依存対策条例」が議案に上がるなど、近年では注目をさらに集めている。しかし、ネット依存に対する研究自体は広く行われているものの、その対策や改善方法については確立されていないのが現状である。本書はネット依存に陥る人の心理を分析し、その現状と依存へのプロセスに関する考察を行うものである。本書の意義は、インターネットが利用者にも与える影響といった直接的なアプローチではなく、これまで研究されてきた理論に基づいた間接的なアプローチを行うことで、既存の議論の実証を図ることである。

本書において、「逃避型ネット使用」という言葉がキーワードとして用いられている。その意味は、日常生活におけるストレスから逃れることを目的とした消極的・受動的に生じるネット使用のことを指す。筆者はここから生じるネット依存のことを「逃避型ネット依存」とし、これに着目して議論を進めている。

本書ではこの逃避型ネット依存について、8章にわたって議論が展開されている。第1章から第3章までは、これまでのネット依存研究を振り返る

とともに、既存のデータや事例を用いることで、ネット依存の現状と実害について紹介している。第4章では、著者が行ったインタビュー調査を元にネット依存者の傾向を考察している。ここで筆者は、インタビュー対象者を、オンラインゲームやチャットを最も利用する「同期交流群」と、ブログやSNSなどを最も利用する「非同期交流群」と、サイトや動画の閲覧を最も行う「閲覧群」の3つに分類している。ここに聞き取り調査の結果を合わせて、ネット依存へのプロセスを仮説的に3つの類型へと分類した。しかし、実際には複数のアプリケーションにまたがってネット依存が発生したり、1つのアプリケーションの中で複数のネット依存プロセスの可能性が考えられたりすることから、アプリケーションのどの機能をどの目的で使用するのかといった点を観察すべきであると筆者は指摘している。第5章から第8章までは、第4章で確認したネット依存のプロセスについての詳細な分析を行うため、中学生と高校生に対して行った量的調査とその考察を行っている。その結果、性別や学年、またはアプリケーションの種類によらず、逃避型ネット依存の影響が大きいことが示された。筆者は、ここから逃避型ネット使用の危険性を示す一方、その他方でストレスを抑制したり、ネット以外のストレス回避方法を獲得したりすることにより、逃避型ネット依存を意識的に回避できると述べている。

本書は、ネット依存に関する既存の議論を、量的および質的な調査で実証した点に意義がある。しかしネット依存は、様々な診断基準があり、その定義についても研究者間で統一されていない。また、ネット依存に関係する要素が多岐にわたることから、たくさんの調査や研究が行われても、それらの他者による考察はあまり活発ではない印象を受ける。筆者はその中で、既存の事例を掘り下げてから調査に臨むことで、これまでのネット依存研究に新しい視点を投じたといえる。さらに、本書の中では様々なネット依存の定義が紹介され、それらの共通点を捉えた上で、広範な定義を採用している。初めから1つの定義にこだわらないことで、既存の議論への思考の余地を広げ、本書の意義をより高めているところが、良い点であるといえる。

しかし、調査内容についてはさらなる分析の余地があったのではないだろうか。本書では、インタビュー調査から仮説を立て、仮説の更なる分析のために量的調査を行っている。インタビュー調査の対象者は20～30歳で、量的調査は中高生を対象として行われている。すなわち、中高年世代や高齢世代のネット依存については調査されていない。調査から理論モデルに当てはめて考察するのであれば、幅広い世代への調査を行う方が、理論に対する信頼性がより高いものになるはずである。

この点は、今後行う筆者の研究に期待したいところである。

昨年、学内では文化祭がオンラインで行われ、国内ではデジタル庁が開設されたり、各学校で遠隔授業が実施されたりするなど、インターネットは我々の生活の中において、広い分野でその存在感を増し続けている。そうであるからこそ、インターネットとの上手な付き合い方を考える必要がある。前述のように本書は、様々なネット依存の定義や議論を知ることができ、日常生活のストレスから逃避するために生じるネット依存という我々に身近な題材を扱っている。本書を一度手に取ってほしい。

【佳 作】

「流浪の月」

西村 瑞音 (社会学部2年次生)

社会にはさまざまな背景を持つ人が存在する。持っている価値観や常識だと考えていることが違い、同じ事実を見ても人によってそれに対する解釈は異なる。そして異なる性質を持つ事実が混在するため、どれが真実なのかわからなくなることがある。『流浪の月』という作品の中では、異なる常識を持つ者たちの思想が複雑かつ繊細に描かれており、それは物語の中で重要な役割を果たしている。

この作品はそれぞれの登場人物の持つ常識同士がぶつかり合いながら物語が進んでいく。主人公・更紗は浮世離れした母のもとで育ってきた。夕食にアイスクリームを食べたり小学生の娘に酒を注がせたりなど、一般的には受け入れられないことでも更紗にとっては常識だった。のちに更紗は父の死と母の家出をきっかけに伯母のもとで過ごすことになったが、その暮らしは息苦しいものだった。更紗の常識は新たな家族の中では非常識だった。そして、帰宅を渋って公園で時間を費やしている更紗を男子大学生・文が引き取った。それはいわゆる誘拐であるのだが、今の生活に苦しんでいた更紗にとってそれは救いの手のように感じられた。教育熱心な母のもとで育った文は丁寧な暮らしを送っていたが、更紗と暮らしてからはその丁寧さが崩れていった。その文の常識を覆した怠惰な暮らしは2人にとって幸せでかけがえのないものとなった。しかし、そのおだやかな暮らしも長くは続かず、文は誘拐犯として逮捕され更紗は伯母のもとに戻った。やはりそこでの暮らしはうまくいかず、家族への暴力を機に更紗は養護施設に預けられた。高校を卒業して施設を出た更紗は、会社の取引先の人だった亮と恋人関係になり同居することになった。しかし更紗は亮に恋愛

感情を抱いておらず、更紗の常識と亮の常識が上手く混じり合うことはなかった。その時期にカフェの店員をしている文と再会し、文のもとに通うようになった。のちに亮のDVが原因で更紗は家を出た。そのとき、更紗が助けを求めたのが文だった。その後、更紗と文はともにカフェを経営するようになり、誘拐事件の被害者・加害者という関係が周囲に気付かれるたびに生活の場所を移動させた。誘拐犯に懐くことは世間的には非常識である。しかし、更紗にとって文は救世主である。世間的な常識と更紗は混じり合うことはないが、更紗はそれを気にしない。

この作品の「事実なんてない。出来事にはそれぞれ解釈があるだけだ。」という文章が印象的だった。世間は更紗に起こった出来事を誘拐事件と考えているが、誘拐された張本人の更紗は誘拐ではないと考えている。このように世間と更紗の間では解釈が異なっている。誘拐事件として広まっていることに対して更紗は「事実なんてどこにもない。みんな自分の好き勝手に解釈しているだけ」と言っている。しかし世間が考える事実も更紗が考える事実も実際に存在すると思う。自分の主観という名のフィルターを通して見たために、内容の異なる事実が複数できたのだ。しかしその曖昧なものを事実と呼んで良いのだろうか。やはり更紗の言うとおりの、事実などどこにもないのかもしれない。

この作品は「普通」の登場人物が少ない。誘拐犯の文やその誘拐犯が好きな更紗、浮世離れした更紗の母など、腫れもの扱いされるような独特な人物が登場する。しかし、その「普通」も自分の価値観によって設定された曖昧なものであり、その曖昧な概念を軸になにかを決めつけることは無責任なことではないだろうか。このように、読者に常識や事実の本質について考える機会を提供しているところが、この作品の魅力的な点であると思う。

ただ、1つ残念に思った点もある。冒頭にレストランで成人の男女が話している場面が綴られているのだが、読み進めるにつれて彼らの特徴が更紗と文の特徴に類似していることに気付く。そこから、更紗と文は成人後も交流があることを予想できる。そのため文が誘拐犯として逮捕され更紗と疎遠になったシリアスな場面でも「いずれ更紗は文と再会できて仲睦まじくなるだろう」と心のどこかで安堵してしまう。たしかに冒頭で男女の姿を描き、物語が進むにつれてその場面の伏線を回収していくのは面白い展開である。しかし、この作品の魅力ともいえるシリアスさを冒頭の内容が邪魔していると私は感じた。そのため冒頭の描写をもう少し不明瞭にするべきではないかと考える。

この作品は「常識」や「事実」がキーワードとなっている。常識も事実も普遍なものとして受け

入れることが多い。しかし、それは自分の価値観を通して捉えたものであり、万人にとっての常識・事実ではないかもしれない。その視点を、この作品は読者に提供している。自分にとっての常

識や事実を疑う必要はないと私は考える。ただ、その常識や事実は必ずしも他者と共通しているわけではないということは忘れてはならないだろう。

書評とは・・・ 「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

<今回の募集要項>

- 応募資格** 本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後5年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
 - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
 - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
 - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 応募要件** (主要項目のみ抜粋)
 - ・応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。
 - ・本文は1,500字以上2,000字程度とする。
 - ・A4版横書き、全てを1ページに収める。本文は、40字×52行の設定とする。
- 募集期間** 2022年5月下旬～9月30日(金) ●**入選発表** 2022年12月9日(金)
- 授賞式** 2022年12月14日(水) ●**応募点数** 47点
- 入選各賞**
 - ①最優秀書評賞 1篇 表彰状および副賞(図書カード1万円)
 - ②優秀書評賞 2篇 表彰状および副賞(図書カード5千円)
 - ③佳作 5篇 表彰状および副賞(図書カード3千円)

次年度も開催予定ですので、是非ご応募ください。(過去には連続受賞された方もいらっしゃいます。)